「バイカル湖ではないかな」
豊原警察署長だったMさんがつぶやいた。私もそうに違いないと思った。みんなが交代で広い湖面を眺めた。
「フレブ、ダワイ」（パンをくれ）
五日目の朝になっても、パンをくれる様子はなかった。明日と言ったじゃないか、私は看守に詰めよった。
「パダッジイ、スコーロ」（待て、間もなくだ）ロシア人のスコーロ（間もなく）は、一年待つのもスコーロであった。
五日目もパンなしで一日が暮れた。列車は湖の岸を半日かけて走った。
動かない囚人車の中に一夜を明かして、朝方ようやくホームのない駅におろされた。イルクーツクであった。
空腹と疲れで動きのにぶい私たちの一行を看守たちがせき立てた。
「スカレイ、ブイストロ」（早く、急げ）
大きな橋にかかった。アンガラ大橋であった。橋を渡るとイルクーツクの高層の建物が目前に現われた。広い通りを、日本人の捕虜らしい人たちが掃き清めていた。街路樹から白い花が舞っていた。
二時間近く歩かされて、着いたところはイルクーツクの刑務所内にあるペレシルカ（囚人中継所）であった。

我等は若き義勇軍

新潟県　霜田　弘

昭和二十年八月七日、東満国境綏芬河義勇隊訓練所に突然ソ連軍が攻めてきた。武器を持たない私たちは、どうすることもできず、涙をのんで降伏した。太陽が沈みかけた七時ころ、四列に歩かされた。八道橋というところに来たとき、パリパリと自動小銃を私たちに向け、撃ってきた。次から次へと殺された。私はとっさに前の山に逃げた。三十人殺された。私は荷物、食物何一つ持たずに山の中を一週間さまよった。一人で寂しかった。そのため、撃たれた仲間二人と一緒になった。
八月二十日、沙河橋で二回目の捕虜となり、収容された。日本に帰すからとのことで一週間、牡丹江まで歩か

された。さらに二段づくりの貨車に乗せられた。着いたところがタイセット地区第五収容所である。千人収容された。後でわかったことだが、特幹の人たちが十人近く、私と同じ大石頭義勇隊訓練所の人たちが五人くらいいることがわかった。

収容所の作業は伐採が主で、鉄道建設、道路建設もあった。私の初めての作業は伐採で、一か月ほどやった。次は退避線建設をやった。二年目ごろから山で切った木材をトラックの通る道路近くの土場まで出す作業で、帰国まで続いた。この作業に矢立班と大場班、二つのグループがあった。各グループとも三十人と馬十頭である。

私は矢立班である。ノルマは馬一頭に対して十クボの木材を山から土場まで出す。一クボとは直径四十二センチで長さ六メートルである。太さは二十センチくらいから大きいのは七、八十センチもあった。長さは六メートルだが、十二メートル、また四メートルもあった。まき材もあった。

山から出した木材を土場で計って、クボ数を出すのである。馬に夏は二輪車を、冬はそりをつけ、その上に木材を積んで運んだ。ソ連の監督は名前をノビスキーといったが、いつも赤い顔をしていたので、私たちは「ノミスケ」と呼んでいた。長靴を盗んで十九年の刑となったが、今年で刑が終わるとのことである。馬を使うのが上手である。

私にも馬が与えられた。義勇軍訓練所では馬、牛を使っていたが、私は一度も使ったことがないのでいやであったが、断ることもできなかった。幸いおとなしい馬だった。私は副馬手で、車やそろをつけないで、木材を積んで、とまっている列へつないで、二頭で引き出すのである。また三頭つないで出すこともしばしばあった。

そのおとなしい馬を使って二か月目に新しい馬が入って来た。紫色した蒙古馬で牝馬である。私は名前を花子とつけた。悪いくせがあって、かみついたり、けったりして大変だった。しかし足が細く速かった。日曜日にはその馬を収容所の所長も乗り回すとのことである。足の速い花子と朝から晩まで一緒である。馬を引くというよりも、馬に引き回されているといった方が本当だ。

一日黒パン三百グラムでは腹が減ってどうにもならない。夏は野草のウド「又の葉」を、秋はキノコをとって食べた。馬が食べる燕麥もいって食べた。朝、仕事始めに馬屋に行って装具をつけて出すとき、馬の食べ残りを手でつかんでポケットに入れる。昼休み、飯ごうのふたでいる。馬の食べているとき、手を出してつかむと、馬は怒ってかみついた。私は思い切り花子の顔を殴りつけた。それっきりかみつかなかった。昼休みあっちこっちと香ばしい燕麥の匂いでいっぱいである。監督も歩哨も見ても知らない顔をしている。馬はかわいそうなので、仕事の合い間に少しずつポケットより出して与えた。馬は喜んで食べた。

私の仕事で一番大変だったのは、古い土場が終わり、新しい土場に移ってきた一、二日間である。車をつけた馬は、狭くてはいれないから、私の副馬だけで整理をやった。監督はつききりである。自分から私の馬の「チン」を取って木材にしばりつける。それを私は引っ張って定められた土場に運ぶ。一日中休なしである。夕方になるとくたくたとなって、身動きもできないほどになる。たとえこの仕事で一〇〇%二〇〇%やったところで、五センチ角の黒パン一切れである。だんだんやせる一方であった。三日目ごろから土場より遠く離れるので、監督の目も届かないので、みんな少しは楽になる。私も材木を積み出すところへ行って、火のそばでどっしり休むことにした。監督が回って来て見ても何も言わなかった。

運搬作業は冬は道路が凍りついているからよいが、夏は大変である。悪路に車輪がはまり、動かなくなる。あっちこっちで私を呼ぶ。三頭つなぎ一気に引き出さないと大変である。私は「ハイヨー!」と掛け声をかける。大抵の馬は私の大声で引き出すようになった。

二十三年ころから少しずつ賃金をもらうこともあったが、山奥のこの収容所では、煙草くらいしか買えなかった。ナホトカで乗船のとき、お金を全部取り上げられてしまった。

二十三年五月上旬、朝礼に十人呼ばれた。その中に私も入った。貨車に乗りバイカル湖に来て初めて帰国だとわかった。ああ、この湖の山のむこうに私たちの第五収

容所があったのだ。「さようなら！」今度こそ本当に日本に帰れるのだ、十五歳で家を出、満州、そしてシベリアと長かったいろいろのことを思い浮かべると、涙が出てくる。六月十七日、故郷の柏崎駅におりたが、両親は亡くなっており、家も人の手に渡っており、なかった。

シベリア抑留記

大阪府　竹山　竹次郎

我々の中隊は日ソ開戦より八月十五日の終戦も知らず、ソ連軍と後方にさがりながら交戦していましたが、八月二十六日の朝六時ごろ、隊長の命令で日本が負けたと知らされ終戦となりました。そのときは残念でした。それから武装解除され、海林に集結して九月中旬、二千人単位で当時の満州を一か月近くも毎日々々朝早くから夜遅くまでソ連兵の監視で北端のソ連領に着き、野原の一角に中隊ごとテントを張って何日かおりました。

その着いた日に、これから寒くなるからといって中隊で綿の入った満服を支給され、もらうなりみんな着てその足で五人で近くに積んであった乾草をまきのかわりに取りに行きましたところ、二人の人が馬車に乗ってきて、私どもをたたき、それに腰をけったりして、私どもが着ている満服まで取り上げて帰ろうとするのです。満服がなければ夏の服一枚だけですから、満服を取り返そうと思って馬車に飛び乗り満服を取り戻しましたが、最後には私を乾草を集めるホークで私を突くようにしましたので、これ大変だと思って満服を取ることができず馬車の走っているときに飛びおりました。

こんなことがありましたと中隊に帰って言いましたら、もうかわりもないからハダカでおれとかわりをもらえることなく苦労しました。

それから何日か、ある日汽車に乗せられ出発しました。私は日本へ帰れるものと思っていましたが汽車は北へ北へと行くのです。何日かたって着いたところは北の北の果てタイセット地区のネブルスカヤ捕虜収容所に入れられ、それからは毎日強制労働させられ、仕事の内容は、鉄道建設、伐採、道路建設、れんが工場、木材工場